

聖書：ルカ 20：45～21：4

説教題：レプタ銅貨二つを

日時：2012年11月11日

イエス様は今日の箇所、「律法学者たちには気をつけなさい。」と語られます。この20章では、律法学者や祭司長たちがイエス様に次々に悪どい質問をしましたが、その彼らも40節で、何も質問する勇気がなくなっていました。イエス様はそんな彼らに最後のとどめをさすために今日の言葉を言われたのでしょうか。もちろんそうではありません。イエス様は、律法学者たちの生き方には非常な危険があることを見て、人々にこのように警告されたのです。前にイエス様は「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。」と言われました。パン種は小さいものですが、中に入ると、パン全体をふくらまし、大きな影響を与えます。ですからそれを許容してはならない。よく注意し、そのパン種が入り込まないようにしなさい、と言われました。それと同じ意味でも人々に「彼らの生き方にならわないように。」と警告しているのでしょうか。

ここに律法学者たちの問題点が5つ、具体的にあげられています。一つ目は「長い衣をまとして歩き回ること」。「長い衣」は、一目で律法学者であることが分かる服でした。イエス様はその「長い衣それ自体」が悪い、と言っているのではありません。問題はそれをまとして歩き回るのが好き、という点です。それはそれによって人々から、普通の人とは違う特別な人たちだ、と見られたいからです。宗教熱心で、敬虔で、頭が良い人たちだ、と思われたいからです。だから彼らはそれを身にまとうだけではなく、それをまとして歩く。いや、ただ歩くのではなく、なるべく人目につくように歩き回るのが好きなのです。

二つ目は「広場であいさつされたりすることが好き」。この挨拶は特別な挨拶、敬意が十分に示される挨拶のことです。単に長い衣をまとして人々から特別な目で見られるだけではなく、言葉に出してそのことを言ってもらいたい。しかも「広場で」というのが大事です。大衆の目が注ぐ中、皆の関心の中心にあって、そのようにしてもらうことに喜びを感じて、わざわざ出かけていく。

三つ目は会堂の上席や宴会の上座が好き。誰が一番中央の席に着くのか、自分はその辺の位置に座れるのか。それはその社会におけるお互いの地位を明らかにするものです。その並び具合を見れば、力関係が一目瞭然です。そこでなるべく上位の席に座ることによって、自分は尊敬されるべき人間であることを自分でも確かめ、また他の人にも確認してもらおう。

このように言いますと、これだから上に立つ人たちはどうしようもない、などと思いたくなりますが、私たちはひとつのようには言えるのでしょうか。私たちは長い服は着ないかもしれませんが、しかし、どこそこの学校出身だとか、あの有名企業に勤めているとか、自分が誇らしいと思っていることをさりげなくひけらかすことはないのでしょうか。あるいは人間関係において自分より下だと思える人には挨拶を心の中で求めることはないのでしょうか。あるいは私たち日本人は競って上席に着くことはしませんが、

むしろ末席を争って、自分は慎み深い人間だと誇り、別の形での尊敬を勝ち取ろうとすることがあるのではないのでしょうか。

さらにイエス様は 4 つ目に、「やもめの家を食いつぶし」と言います。ある人は、律法学者たちは財産分与に関わる弁護士のような働きをすることによって、巧妙に自分の利益を得ていたのではないかと、言います。また他の人は、彼らはやもめの世話をしつつ、実際はその返礼に期待していた、あるいはそれを奨励するようなことを言って、結果的にむさぼり取っていたと言います。具体的には良く分かりません。しかしここに、その人々を自分の利得のための手段にしていたことが示されています。

そして 5 つ目は「見栄を飾るための長い祈り」。これも長い祈りそれ自体が悪いものではありません。問題はそれが演技になっていることです。人にどれだけアピールできるか、に心が占められていて、肝心の神に心が向けられていない。つまり、神さえも、自分の評判獲得の踏み台にしているということです。

イエス様はこのような「偽善的な」歩みをしている彼らは「人一倍厳しい罰を受けるのです。」と言われました。これはまず教師や指導者たちが心して聞くべき言葉でしょう。人一倍厳しい罰を受けるのは、それだけ責任ある立場にその人たちが立っているからです。ヤコブ書 3 章 1 節：「私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。」そしてこの「格別の厳しさ」は確かに教師に対する規準ですが、これはそれ以外の人々は全くさばかれないということではありません。ですからイエス様はここで人々に向かって、「気をつけなさい」と言っているのです。人からの評判、名誉、尊敬を集めたいという願いは誰にでもあるでしょう。外側だけを繕い、見栄を張ろうとする誘惑は誰にでもあるでしょう。しかし私たちが覚えなければならないのは、人の間での評価がどうであれ、神による最終評価が必ずあるということです。ある人は、この誤りに陥らないように、机の上、あるいは生活の中で良く目に付く場所に、次の言葉を貼っておくべきだ、と言いました。「神よ、あなたは私を見ておられます。」 私たちの行ない、言葉、思い、想像することのすべてが、この方の御前でなされています。造られたもので、神の前で隠せおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。そしてこの神に対して私たちはやがて申し開きをしなければなりません。その自覚から、単に外側を飾る歩みではなく、まず内側が整えられ、それが外側に自然に現れるような歩みへ変えられることを祈り求めなければなりません。

さて、こうした律法学者たちの姿と対照的なものとして示されているのが、続く 21 章の貧しいやもめの献金の記事です。金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れていたのに混じって、彼女がレプタ銅貨 2 枚を投げ入れているのをイエス様はご覧になりました。レプタ銅貨とは欄外に注釈がありますように、1 デナリの 128 分の 1 に相当する最小単位の銅貨です。最小単位の貨幣ということ言えば、私たちのお金では 1 円玉 2 枚になります。1 デナリは当時の一日分の給料に相当しましたので、その 128 分の 1 は、1 円玉よりは値打ちがあつたかも知れません。しかし、そのコインは当時の最低額のお金であつたことには変わりありません。ところがイエス様はこのやもめこそ、

どの人よりもたくさん投げ入れた、と言われます。なぜでしょうか。イエス様は4節でこう説明しています。「みなは、あり余る中から献金を投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、持っていた生活費の全部を投げ入れたからです。」ここに神は何を見ているのかが示されています。私たちは人間が差し出したものだけを見えています。しかし神はその人がどのような経済状況から、どれくらいの犠牲を払ってそれをささげているか、を見ている。そして犠牲そのものよりも、その犠牲に示されたその人の心を見ておられるのです。

神がささげものそれ自体よりも、それをささげるその人自身を見ておられることは、創世記4章のカインとアベルのささげものの記事にも示されています。主は、「アベル」と「そのささげもの」に目を留められた、とか、「カイン」と「そのささげもの」には目を留められなかった、と記されていて、ささげものよりも先にアベル自身、またカイン自身を見られたことが示されています。もちろん心さえそこにあれば、額の大小は問題ではない、ということにはなりません。私はこれを心からささげますと言いながら、痛くもかゆくもないささげものを持ってきても、それは偽りであり、欺瞞です。イエス様は確かにやもめの心を見られましたが、彼女の心はそのささげものに表れたのです。神は行ないに現われる心を喜ばれるのです。

このやもめの姿から私たちが学ぶことは何でしょうか。三つのことに注目したいと思います。まず一つ目は、彼女は他の人の目を気にしてではなく、ただ神の御前に立ち、神に向かってこの献金をささげたことです。律法学者たちは、人の目にそれはどう映るかということに一番心を砕いて行動しました。しかしこのやもめは、神を見つめ、神にこの献金をささげました。人の目を意識するなら、レプタ銅貨2枚はあまりにも少額です。人前で恥ずかしいと思うこともできますし、こんなものをささげて何になるだろうか、と卑屈になることもできます。しかし彼女は右や左を見てではなく、神にまっすぐ向かい、神の前に一人で立って、これをささげたのです。

私たちはどうでしょうか。私たちは他の人の目や評価を気にしやすいものです。この私の献金額を知る人にこれでは少ないと思われるだろうか、あるいは立派に献金している敬虔な人だと思われるだろうか、などと。しかし献金は神にささげるものです。ですから人間の顔色を伺ってではなく、神との間で一人一人が決めるべきことです。この基本に私たちはいつも立っているのでしょうか。

第二に彼女は、神との生ける交わりに日々歩んでいました。ここを読む人にとって衝撃的な点は、何と言っても彼女が生活費の全部をささげたことでしょうか。最小単位のお金2枚しかないのですから、これでは献金は無理と言ってもおかしくない。10分の1献金をしたくても、1枚差し出したら50%献金になってしまう。だからしたくてもできないと結論してもおかしくない。ところが彼女は1枚どころか、2枚ともささげたのです。なぜそうしたのでしょう。その理由は書いてありませんが、それは彼女の心が、心からの神への感謝にあふれていたからに他ならないでしょう。そしてこのことは、彼女がいかに普段から神を知り、神との生ける交わりの中に歩んでいたかを映し出しています。人間的な目で見ると、彼女は決して恵まれていません。夫と死

に別れ、女性一人で生活することが厳しい中で、手元には2レプタしかなかった。感謝どころか、文句が出て来てもおかしくありません。ところが彼女は神を見上げ、神と交わり、心から神に感謝して生活していたのです。実にこの非常に貧しい生活の中にあっても、このように神に感謝し、神に信頼する信仰の歩みは可能であることをこの箇所は私たちに示しています。

ですから私たちにとっても大切なことは、私は神との生ける関係の中に日々歩んでいるか、ということです。神に正しく向き合っているなら、私たちは自分がとてつもない恵みの中に日々生かされていることを自覚せずにはいられないでしょう。今日もこうして命を支えられています。必要なものをすべて備えていただいています。そして何と言っても、神は私たちのために尊い一人子さえも与えてくださいました。そのキリストの贖いによって、私たちの人生は180度変えられ、地獄に向かうはずの人生が、天国に向かうものとなりました。地上の生活でどんなことがあっても、すべては益と変えられて、その永遠の栄光に必ず至るようにと導かれています。この神の恵みを思うなら、どんな感謝をささげてもささげ尽くせません。そしてその思いは、ささげものに現れて来るはずでしょう。よく献金は「信仰のバロメータ」と言われます。それは私たちがどれほど神に感謝し、神との生ける関係の中に歩んでいるかを映し出している。果たして私のささげものは、私と神との関係について何を示しているでしょう。もちろん、献金さえすれば良いものではありません。私たちの感謝と献身の思いは、その他の生活全般にも現れ出て来るものでなければなりません。その生き方全体と一つにつながっているものとして、その一つの目に見える具体的なしるしとして、私たちの献金があるのです。

最後三つ目は、彼女はこの献金を喜びを持ってささげたことです。彼女にとって、神の愛にお応えするために、この時持っていたレプタ銅貨2枚をささげることで以外の選択はありませんでした。しかしだからと言って、義務感から、悲しみながらこれをしたのではない。彼女はレプタ2枚をささげることに、自分のこれからの生活も、自分自身そのものも、丸ごと神の御手にささげた。そしてそのようにすべてをささげ、委ねた時、彼女は大いなる平安と安らぎに生かされたことでしょう。

私たちは喜んでささげる者でしょうか。せつかく自分で献金する額を決めても、惜しいと思いつつながら、あるいはこれがあればあれが買えるなどと頭のすみで思いつつながらささげたのでは台無しになってしまいます。献金は神がしてくださったことに感謝して、私たちが自分の応答をささげる時です。それを正しくささげる時、私たちの心には、神がくださった恵みの数々が記されているはずでしょう。その神にこうして献金できること、私たちの感謝を表せることは、神を愛する私たちにとって喜びの時であるはずです。またその時、この方に全幅の信頼を持ってより頼む私たちには、言い表すことのできない深い平安が訪れるはずでしょう。そのような真心からのささげものを神は喜んで受け取ってください。人間的な比較において額がどうであれ、あなたはどの人よりもたくさん投げ入れたと言って評価してください。そして神はご自身の喜びを必ず現わしてください、その人は益々神の豊かな祝福の中を歩むように導かれるのです。